

経営情報学会 2013 年春季全国研究発表大会

大会実行委員会

2013年6月29日(土)～30日(日)、慶應義塾大学三田キャンパス南校舎にて「成熟情報社会での経営～機会の創れ(うまれ)、人の紐帯、感動の弾けり～」という統一テーマで、本学会2013年春季全国研究発表大会が開催された。

梅雨時期の開催で天候が心配されたが、大会中の2日間にわたり、気持ちの良い青空のもと、東京タワーが遠望できる新しい校舎において250名を超える方々に参加いただいた。皆さまのご理解に心から感謝したい。

今回の研究発表大会では、まず、29日13時からの開会式において、慶應義塾の清家篤塾長から歓迎の挨拶が述べられ、経営、情報の両語とも福澤諭吉と縁の深い言葉であることが紹介された。また、基調パネルディスカッション(1日目)、特別講演(2日目)のほか、19のセッションが実施され、65件の発表があった。また、6つの研究部会が開催された。本ルポではその一端をお伝えする。

1. パネルディスカッション

基調パネルディスカッションは、6月29日13:30から、南校舎ホールにおいて、『経営情報の今、そして未来』というテーマで行われた。

パネラーには、ヤマト・ホールディングス執行役員で2012年度日経CIOオブザイヤーの小佐野豪績氏、総務省情報流通行政局官房審議官の谷脇康彦氏、経営情報学会長の平野雅章氏(早稲田大学)をお招きし、モデレーターの高木晴夫大会委員長の司会のもと進められた。



パネルディスカッションの様子

向かって左手の谷脇氏、小佐野氏、平野氏の順にプレゼンテーションが行われた。谷脇氏からは、政府がどのような情報戦略を考えているのか、また4つのビッグデータの構成要素などを中心に報告がなされた。小佐野氏からは、企業の視点からの情報活用という視点で、情報社会が成熟した際に経営者は何に注目すべきかという問題意識から、データの活用と、データ自体の商品価値について発表をいただいた。データの処理まではできているものの、分析・活用ができていないという現状、またデータサイエンティストの必要性について論じられた。全体ディスカッションでは、次大会のキーワードでもある「ビッグデータ」について活発にコメント・質問などが行き交った。例えば、ビッグデータとはただビッグなデータではないのではないかと、という問いに対し、小佐野氏からはヤマトだからこそそのデータの価値についてコメントがあった。また、個人情報のお話についても質問があり、どこまでがデータとして使えて束ねられるのか、またどこまで政策として踏み込めるのかなども問題提起がなされ、ビッグデータに関する留意すべき点などについても議論が及んだ。期待が集まるビッグデータについて多様な論点が浮き彫りになるパネルディスカッションになり、次大会でも活発な議論が期待される。

2. 特別講演

特別講演は、コクヨ株式会社【WORKSIGHT LAB】所長の齋藤敦子氏より、『経営と共に進化するワークスタイルと創発する場』というタイトルで講演いただいた。イノベーション、創発が起こるワークプレイスの設計について、国内外のケースについて写真を交えて紹介していただいた。クリエイティブカルチャーを体感できるオフィス空間、日常的な行動からカジュアルコミュニケーションが生まれる仕掛け、部門を超えたコミュニケーションを誘発する装置やルールなど、社員が主体的に働くオフィス空間づくりについて議論が行われた。参加者は、コクヨ株式会社が取り組む「Creative Lounge

MOV」をはじめ、興味深い多くの事例にひきつけられている様子であった。

3. 一般発表

一般発表は、19のセッションが設置された。そのなかで、29日会場C（政府・自治体）の様子をお伝えする。

最初の発表は「災害発生時における地方自治体の災害情報の収集と提供」、次の発表は「政府・自治体システムの住民評価」、3番目は「『顧客満足』の民間比較」、4番目は「オープンガバメントの推進と公共サービスの変容」というテーマで発表が行われた。

一般発表については、すべてを確認することができなかったが、各セッションとも本質を問う、活発な質疑応答がなされ、発表者、参加者共に刺激的で充実した時間となっていた。

4. ポスター発表

29日の9:00～10:30にポスター発表が行われた。立て看板が教室内に6つ並び、その一つ一つに発表用の資料が提示され、発表者はその資料の前に立って個々にプレゼンテーションを行った。会場が狭く感じるほど多くの人々が参加し、参加者と近い距離で研究発表について意見交換ができるポスター発表の意義は大きいと感じた。

5. 研究部会

本大会では、6つの研究部会が開催された。ここでは、そのなかで、29日I会場（研究部会3事例研究方法）の模様をお伝えする。

國領二郎氏（慶應義塾大学）、根来龍之氏（早稲田大学）、林幹人氏（愛知学院大学）の3名が中心

となり、「いまいちど経営情報学会における事例研究の意義を考える」というテーマで研究部会が進められた。学会内における投稿論文数が減っていることに問題意識を抱き、本学会における事例研究論文の意義について活発なディスカッションが繰り広げられていた。



研究部会の様子

6. 懇親会

初日（29日）の締めくくりとして、南校舎内の「ザ・カフェテリア」において懇親会が開催された。慶應義塾大学の國領二郎氏の乾杯の発声のあと、平野会長による今後の経営情報学会のあり方についてのお話、総会で決定した次期役員の紹介、次年度開催校の紹介などが行われた。懇親会は、終始、和やかな雰囲気のもと、各所で交流の輪の花が咲いていた。

2日間にわたって行われた2013年春季全国研究発表大会も盛況のうちに終了した。大会委員長、大会実行委員長、プログラム委員長、スタッフ一同、学会理事をはじめとして全ての関係者の皆様のご理解、ご協力に心から感謝をしながら筆を置きたい。次回全国大会の盛会を祈念している。